

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號四第

卷八十三第

行發日一月四年九和昭

## 論叢

取引所取引税に就きて……………法學博士 神戸正雄  
 ヘエムの利子生産力説……………文學博士 高田保馬  
 農産物のプーリングに就いて……………經濟學博士 八木芳之助

## 時論

輸入割當制(Quota system)に就いて……………經濟學博士 谷口吉彦

## 研究

租稅經濟の發展限度……………經濟學士 大畑文七  
 レスキューウルの長期的景氣變動論……………經濟學士 松岡孝兒  
 百貨店の植民地進出……………經濟學士 堀新一

## 說苑

労働者退職手当制の改革……………經濟學士 大塚一朗  
 ビリモヴェイツチの貨幣價值論……………經濟學士 青山秀夫

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## ピリモヴィツチの貨幣價值論

青山秀夫

小序 Alexander Bilimowicz, Professor an der Universität

Laibach: Kritische und positive Bemerkungen zur Geldwerttheorie. Zeitschrift für Nationalökonomie. 2. Bd. 1931. 此論文を紹介することが本稿の目的である。ピリモヴィツチは本論文に於て、貨幣價值の問題、ひいてはフイツシャーの交換方程式 (Verkehrsgleichung)<sup>1)</sup> が一般均衡の體系に於て如何なる意義を有するかの問題を研究してゐる。而してそれは、第一部、批評的説明 (S. 353-375)、第二部、積極的説明 (S. 695-732) に分れてゐるが、私は自己裁量に依つて適宜その積極的主張を要約して説明しようと思ふ。即ち、本稿第一節では先づ彼の貨幣本質觀、貨幣價值の概念規定を略述し、第二節では一般均衡の體系に交換方程式を取入れるその主張について説明し、最後に第三節に於てその前提を吟味し乍ら、卑見を開陳することとする。

—

ピリモヴィツチはその貨幣本質觀に於て、謂はば機能價值説 (Funktionswerttheorie des Geldes) を加味し

た指圖證説 (Anweisungstheorie) の立場を採る。曰く、

「貨幣を或る特殊の經濟財 (ein wirtschaftliches Gut sui generis) と認めること、即ち何時如何なる場合にも現物財 (Realgüter) と對立すべき、指圖證類似的の交換財 (ein einer Anweisung analoges Tauschgut) と看做すこと、が貨幣の性質及び本質に最も良く適當するであらう」と。然し乍ら、貨幣に固有の價值がなしとして、直ちに夫故に貨幣は觀念的記數乃至は觀念的計算單位に過ぎず、とする見方は、通貨數量の所與性 (供給の有限性) を液却することとなる。<sup>2)</sup> 此の理由の下にピリモヴィツチは此の後の見方を避けてゐる。

然らば貨幣は經濟財として如何なる特色を有するか。此の説明如何によつて「經濟的數量」の一つとしての貨幣が一般均衡に於て占める地位が決定される譯であるが、此の問題に對する彼の解答は極めて傳統的である。(一)消費財に對して、「人間は貨幣そのものに對して直接なる欲望を持たぬ。」<sup>3)</sup> 従つて貨幣に對する欲求、貨幣の效用乃至主觀價值は、生産財と同様に、間接的

1) I. Fisher. Purchasing Power of Money. New and revised edition. 1920. (高城仙次郎譯。貨幣と物價) 周知の如く、交換方程式は  $MV + M'V' = PT$  を以て表現される。(ibid. p. 196. 邦譯. p. 290.) 本式に於て  $M =$  the average amount of (actual) money in circulation in the community during the year.  $V =$  the average rate of turnover of (actual) money in its exchange for goods (the velocity of circulation of money) (ibid. p. 24. 邦譯. p. 31.)  $M' =$  the total

派生的であつて、貨幣と引換に、貨幣の交換能力に依りて獲得し得べき財に依つて左右される。(二)貨幣は生

産財とも異なる。生産財對消費財の數量的關係は技術的に決定され、市場とは没交渉である。貨幣の場合には、取引數量は交換と價格とに依りて定まり、取引は技術の制限を離れて無限に行はれ得る。貨幣は、無限の流通を使命とする交換手段なるが故に、商品流通に與へる効果が伸縮自在である。「従つて、一般的に云へば、同一の貨幣數量が、極端な例外的事例を除けば、大體に於て如何なる任意の結果をも生じ得る。即ち(時に併行して、時に前後して)大體に於て如何なる任意の財數量をも置き換へ得る。而して又逆に、同一の經濟的結果、即ち一定財數量の取引が大體に於て如何なる任意の貨幣數量の媒介を以てしても遂行され得る。」<sup>4)</sup>ピリモヴィッチは此の點に貨幣の根本的特殊性を認め、更にそこから、後述の理由によつて、「貨幣價值と貨幣數量との間の反比例的關係、……貨幣數量説を貨幣に適用する可能性」が生ずると説くのである。<sup>5)</sup>吾々は茲

に貨幣本質論を去り、貨幣價值論に關する彼の説明を聽く必要がある。

既述の如くピリモヴィッチは指圖證説によりて貨幣の本質を説き、機能價值説的説明を用ひ乍ら貨幣數量説を主張しようとしてゐる。周知の如く機能價值説は貨幣數量説の否認に導くか、<sup>6)</sup>或ひはその修正、所得説(Einkommenslehre des Geldes)に導くか、であつた。

従つて此の點にピリモヴィッチの貨幣價值論の特色が存することは事實である。以下此の特色を中心に説明を進めよう。

所得説の根本は所得單位(Einkommenseinheit)と貨幣單位(Geldeinheit)とを同一視する點にある。<sup>8)</sup>然るにピリモヴィッチに於ては此點は少しも問題とならぬ。曰く「私は、貨幣價值と云ふ場合、唯貨幣の客觀的交換價值、即ち經濟財の貨幣價格の逆數値(der objektive Tauschwert des Geldes, der den reziproken Wert der Geldpreise wirtschaftlicher Güter darstellt)と云ふ意味にしか解釋しない。然し私は貨幣價值の問題に關する以

deposits subject to transfer by check.  $V'$  = the average velocity of circulation (of deposit-money) (ibid. p. 48. 邦譯. p. 63.)  $P$  = the index number of prices.  $T$  = thh volume of trade. (ibid. p. 196. 邦譯. p. 290.) 以下の説明では獨乙語を用ひて  $GU + G'U' = HP$  に書き改める。

1) Bilimovicz. a. a. O. S. 366.

2) Joseph Schumpeter (Das Sozialprodukt und die Rechenpfennige. Archiv für

下の研究に於て一般的物價水準の問題 (das Problem des allgemeinen Preisniveaus) よりも寧ろ貨幣價格一般の決定の問題 (das Problem der Bildung der Güterpreise überhaupt) により多く注目してゐる。<sup>9)</sup>此點に於て貨幣價值を以て「人間の精神生活の中にその座席を持つ所の關心現象」<sup>10)</sup>としたウィーザー、乃至は「私的貨幣所得といふ流通經濟固有の現象」<sup>11)</sup>をその貨幣論の出發點としたシユムペーターとは多少傾向を異にするのである。然らば貨幣數量説は如何なる意味に於て一般的物價水準の問題を解決するか。彼は既述の如くフィッシャーの交換方程式を採る。即ち  $GU + GV = HP$

簡單には  $G = HP \cdot P = \frac{G}{H}$ 。

個々の商品の取引數量の總和 ( $M_{HP} = HP$ ) をつくるに當つて、フィッシャーは次の方法を用ひた。基準年度に於て一定額の貨幣を支拂つて獲得し得る商品數量を以てその商品の數量計算の單位とした。<sup>12)</sup>「従つてかく變形された交換方程式は一般的物價水準の絶對的な高さを示すものではない、基準年度と比較してのその相

對的な高さ、即ち一般的物價水準の指數を示すのである。<sup>13)</sup>換言すれば、吾々は貨幣數量、商品取引數量、基準年度の商品價格を知つてさへるれば、當該年度の個々の商品價格は未知數であつても、當該年度の貨幣價值を測定し得る。 $G = HP$  は  $G = M_{HP}$  そのままではないが、これだけの意義は持つのである。

斯くの如く限定された意味に於ける貨幣價值決定の法則を示すのが貨幣數量説である。「貨幣數量説の特徴は、價格水準は、他の條件にして變化なければ、(此のことが可能である限り)に於てではあるが)貨幣その他の流通手段の數量の増減に直接比例して變動する傾向がある、といふ點にある。<sup>14)</sup>貨幣は本質上、直接に欲望を充足し得る財ではなく、その價值が派生的であることは既述の如くである。他の經濟財は、その數量増減の結果價格が變動する場合、價格の變動は數量の増減と不比例的に行はれる、——財が直接に欲望の充足に役立つから。従つて小麦といふ如き特定商品のみについて「小麦價格の數量説」を説くことは出来ない。財が直接

Sozialwissenschaft und Sopolpolitik. 44. Bd. 1917-18. S. 644 ff.) も指圖證説が貨幣價值の問題の否認に導かぬことを、本位制度の意義に關聯させて説明してゐる。

3) Bilimovicz. a. a. O. S. 362.

4) Bilimoricz. a. a. O. S. 363-364. 此の第二の點の主張が I. Fisher の數量説の基礎づけに對する批評をなしてゐる。(S. 358-359.)

に欲望充足に役立たぬ貨幣に於てのみ「貨幣價値の數量説」(Quantitätstheorie des Geldwertes)が成立つ。然も貨幣の交換價値は數量説によつてでなければ説明出來ぬこととなる。

ピリモヴィツチは敍上の如く貨幣數量説に依つて一般的物價水準の決定を説くのであるが、一般的物價水準とは抑々何か。此の概念は理論經濟學上如何なる意義を有するか。統計方法上の問題は別としても、貨幣數量の變動は、極めて稀有の場合を除けば、商品全體のではなく、ただ個々の商品の需給とのみ關聯して起るのであり、然もその結果價格體系に變動が起るが、個別經濟の此の變動せる價格に對する適應も夫々異質的である。かくて貨幣數量が價格に及ぶ影響は名目的でなく、實質的である。従つて *ceteris paribus* といふ前提が前提し難いこととなる。かかる理由から一般的貨幣價値なる概念を否認しようとする意見が最近時起つてゐる。(ハーバラー、<sup>15)</sup>ハイエック、<sup>16)</sup>ケインズなど。)これによつて貨幣數量説の意義が全部的に否認される譯

ではないが、「一般的價格水準の問題」なるものが理論經濟學上殆んど實益なきことは承認しなければならぬ。吾々は次に「貨幣價格決定の問題」の解答としての貨幣數量説を見ようと思ふ。<sup>18)</sup>

## 二

一般均衡に於ける交換方程式の意義について、着眼點や論據のこみ入つた説明は後廻しにして、先づ彼の結論から述べて見よう。

交換方程式(III)の左邊は貨幣の供給を、右邊は貨幣に對する需要を意味し、方程式は、均衡状態に於て貨幣の此の需要と供給とが一致する點に價格の状態が定まる、ことの數式的表現である。<sup>19)</sup>流通方程式を構成する經濟的數量は凡て函數的な(因果的ではない)相互依存の關係を有し、經濟理論の與件たる諸々の主觀的な、或は客觀的なモメントの結果である。従つて流通方程式だけでは、何者をも決定し得ぬのであつて、それが市場機構でその均衡の一つの條件をなす場合に於て始めて此の被規定性を得る。従つて流通方程式は、

- 5) Bilimovicz. a. a. O. S. 364.
- 6) F. F. v. Wieser. Gesammelte Abhandlungen, hrg. v. A. Hayek. 1929. S.171-182. S. 212-S. 219.
- 7) G. Schumpeter. a. a. O. 未發表拙稿「シエムペーターを中心として見たる靜態的貨幣論」。
- 8) J. Schumpeter. a. a. O. 上掲未發表拙稿、このことは一應日常經驗に見られ

需要と供給との均衡の貨幣に關する特殊の場合として、均衡の體系に加はつて始めて有意義となるし、亦必ずこれを加へねばならぬ。<sup>20)</sup>

此の結論は數理的に表現すれば一層明瞭にならう。

(後半「積極的説明」附録による。)

想定。(1)「少くとも部分的な社會的分業に於て進行する所の、永續的經濟過程にして、唯貨幣のみを媒介として行はれる交換流通」。(2)「靜態的な經濟體系、即ち全期間中經濟の経過を左右する一切のモメントが不變である所の、體系。……従つて此の體系内では完全な靜態的過程の成立以後各經濟は、現物形態では毎年同一數量だけ生産される經濟財より成る所の、その規則的所得を消費する。」<sup>22)</sup>

既知數。A 主觀的モメント、(1)經濟の數  $m$ 、(2)個々の經濟の  $n$  種の消費財  $A, B, \dots, N$  (貨幣を除く) に對する夫々の需要函數 (幾何學的には限界效用曲線を以て示される。)

$$a, f_1(a), f_2(a), \dots, f_n(a)$$

$$f_{a,m}(a), f_{b,m}(b), \dots, f_{n,m}(n)$$

B 客觀的モメント、(1)各經濟の年々の實質所得、(年々更新せられる年の初めの消費財在荷)。

$$a_1, a_2, \dots, a_m$$

$$p_1, p_2, \dots, p_m$$

(2)各經濟の年の初めの貨幣在荷。

$$E_1, E_2, \dots, E_m$$

(3)貨幣の流通速度。<sup>23)</sup> 1.

未知數。(1)各經濟が交換後所有する消費財數量。

$$a'_1, a'_2, \dots, a'_m$$

$$p'_1, p'_2, \dots, p'_m$$

$$E'_1, E'_2, \dots, E'_m$$

$m$  個の未知數

(2)各經濟が期間終了後所有せる貨幣の數量 (次の期間の爲に保留される必要な手許準備金 *Kassenbestand*)。

$$g_1, g_2, \dots, g_m$$

(3)消費財價格。

る自明の事實として前提され得るが、その基礎づけには主觀價值學說的均衡論を必要とする。

9) Bilimovicz. a. a. O. S. 353.

10) Wieser. a. a. O. S. 208.

11) Schumpeter. a. a. O. S. 627. これが均衡論の主觀價值學說的説明と貨幣價值に關する所得學說との結び目である。私は上掲未發表拙稿に於て此の事情







消費はその所得に等しく(貯蓄は度外視する)、其結果個々の經濟が次の期間の爲に貯藏する所の必要な現金は決行期間中の此の經濟の貨幣在荷に常に等しい、といふ簡單化の爲の假定に基づいてゐる。然し乍ら彼によれば、かかる簡單な問題の提出は貨幣流通の典型的な現象を無視してゐる。個々の經濟が次期の爲に準備すべき現金(所謂「手許準備金」)は決して一定不變のものではない。或る經濟には此の「手許準備金」が現在の Geldvorrat よりも小額であることもあるが、此の場合には餘剰の貨幣を消費する他はない。更に「手許準備金」が Geldvorrat よりも大なる經濟では最初から消費を制限して、充分な「手許準備金」を造らねばならぬ。而して多くの場合如何なる價格體系も直ちに各經濟の最初の貨幣在荷と「手許準備金」との一致をもたらし得ない。此の結果生ずる個別經濟相互間の貨幣の流出入をピリモヴィツチは「貨幣の擴散」(Gelddiffusion)と呼んでゐる。(これが前の假定が見逃してゐる事實である。)これが貨幣流通の領域に於ける外部的動態的變動の典

ピリモヴィツチの貨幣價值論

型的な場合であることは謂ふ迄も無いのであつて、その結果價格に變動が生ずる。然し乍らそれは亦靜態經濟に於ても、所與の條件の下に於て最大限度の欲望満足を実現せんが爲に、起り得るのであつて、「完全に靜態的な經濟過程が成立する爲には論理上不可避な經濟的的前提」(die logisch unvermeidliche innere Vorbedingung zur Herstellung eines vollkommen stationären Wirtschaftsprozesses)たる意義を有する。

かくの如く貨幣の擴散現象に重要な意義を認めるが故に、彼は一般均衡の體系に對して、單に交換方程式のみならず、個別經濟に於ける貨幣の供給と需要との等式をも附加へるのである。かくすることによつて、貨幣機能が技術的制約を蒙らず、貨幣數量と取引價額とが没交渉であり得ることより生ずる貨幣特有の難問題が解決される。

### 三

以上を以てピリモヴィツチの貨幣價值論の紹介を終へたいと思ふ。ただ然し脚註に記した通り、「限界效用

價格の平均)は物價標準を表示すべき指數となり、其貨物數量單位の總數は貨物賣買量たるべければなり。(高城仙次郎譯、貨幣と物價、p. 290.) 念の爲に數字を用ひて説明する。(但し簡單の爲、算術平均を用ひる。) A商品の基準年度に於ける一疋當りの價格を  $p_a^0$  とすれば、 $\frac{1}{p_a^0}$  疋が上述の計算單位である。従つて任意の年度に於ける A商品の取引數量を  $h_a$  疋とすれば、

均等の法則を援用せずして、然も消費財に對する欲望の強さ、從つて亦其の效用は唯比較し得るのみにして、測定し得ざる大いさであることを、顧慮し乍ら「一般的な二元主義的な經濟理論の一部分として」<sup>37)</sup>彼の二元主義的貨幣價值論 (dualistische Geldwertlehre) が展開されてゐることについては、全然紹介を怠つてゐることを斷つて置かねばならぬ。然し私見を以てすれば、貨幣論プロパーにとつて此の點は寧ろ副次的なる性質のものである。そして重要なのは次の點ではあるまいか。

既述の如く、交換方程式は貨幣に關する需給の等式として一般均衡の體系の中に入り込む、といふのが彼の意見である。此の意見は充分に正しい。然し乍ら此の交換方程式の挿入によりて、均衡が一義的に決定せられると云ふ爲には何が前提とせらるるか。その前提は貨幣數量と流通速度との所與性である。此の二者は右邊が共に未知數であるに對して、經濟理論の與件として既知數であらねばならぬ。

ビリモヴィツチは此點を次の如く説明してゐる。

貨幣の流通速度は生産組織及び取引の慣習によつて左右される。然るに此の後の二者は均衡理論によつて所與である。從つて流通速度も亦所與と看做され得る。<sup>38)</sup>次に現金貨幣及び信用貨幣についてであるが、此の中金屬貨幣については問題は存しない。問題になるのは銀行券及び信用の伸縮性である。然し此の變動が一定の限界を持つことは自明の事實である。(ビリモヴィツチは極めて簡単に、利子を以て此の數量の調節を説明してゐる。)「かかる理由から經濟理論は貨幣數量をも、勿論現實への多少の近似性を以てに過ぎないが、與へられた大さと看做し得る。」<sup>39)</sup>勿論ここに所與であるといふ意味は、因果的にこれが原因となつて價格を決定すると解してはならぬ。飽迄函数的に解釋さるべきであつて、現實には經濟外的與件の作用も經濟機構を通して此等の經濟的數量を決定するのである。

ここで吾々が銘記を要するのは、經濟理論によつて所與たるべき交換方程式の左邊(以下簡単に貨幣數量を

指數の計算には  $h_a + \frac{1}{P_a^0}$  として現はれる。かくて基準年度の物價指數  $P_0 = \frac{\sum h_0 P_0}{\sum h_0 P_0} = 1$  任意の年度の物價指數  $P = \frac{\sum h_p}{\sum h_p} \left( \frac{P_0}{H} \right)$ 。

13) Bilimovicz. a. a. O. S. 354.

14) Bilimovicz. a. a. O. S. 358.

以て代表せしめたい)は全經濟領域に關するものであつて、單に所得に關するそれのみではないことである。ピリモヴィツチがウィーザーの „Geldvorrat“ „Geldbedarf“ の概念が範圍狭少であると批評してゐるのは、此の限りに於て正しいと思ふ。然し乍ら、シユムペーターの流通方程式修正を批難し乍ら、然もそれが「*tautologie* でないことをシユムペーターの爲に辯護してゐるのは、不徹底の感なきを得ない。シユムペーターは流通方程式が「*tautologie* でないことを自ら辯護して曰ふ、「所得の總額はただ貨幣的原因からのみ定まる」と。然るに他方に於て此の所得總額、彼の所謂「流通領域 (Zirkulationssphäre) における、貨幣數量」は極めて變動し易いものであつて、「經濟生活の各状態に適應せんとする傾向あるもの」である、といふ<sup>43)</sup>。然も吾々は此の矛盾を更にピリモヴィツチ自身に於て見る。均衡理論によつて所得は未知數の筈であるにも拘はらず、此の所得(上述の方程式組織に於ては $g$ )が先づ既知數として與へられて居り、<sup>44)</sup>その總和たる貨幣數量は、既知數の總和たるが故に、既知數である如く取扱はれてゐる。

る。此の點の辯明なくしては、彼の折角の説明も誤解を招きはしないであらうか。私はこれを恐れる。

かくて結論はただ一つしかない。先づ均衡理論にとり入れらるべきは、ただ交換方程式だけである。先づこれを行つた上ならば、所得も未知數でなく既知數となるから、その後は所得を既知數として取扱ひ得る。ピリモヴィツチは財數量が最初から與へられず、生産によつて決定される場合にも、同様の取扱ひが許されるところとして「ただ客觀的モメントとして最初の財在荷の代りに、各經濟の手許に最初與へられてゐる生産手段の在荷と財の技術係數とが現はれるのみである」と云ふが、然し財の側のみでなく、此の場合貨幣の側をも顧慮する必要があるのである。

私の批評は餘りに形式的であつて、實益がない如く思はれるかも知れない。然し尠くとも彼の論文の後半の「積極的説明」の問題の本質を明かにするには役立つと思ふ。何故かなれば、ここでは均衡理論に於て問題とする完全無缺の靜態ではなく、その成立の道行、然もその貨幣的側面が問題とされてゐるのであるから。此の後の點まで筆を進めることは有意義ではあるが、今の仕事ではない。

- 15) Gottfried Haberler. Kritische Bemerkungen zu Schumpeters Geldtheorie, Zur Lehre vom „objektiven“ Tauschwert des Geldes. Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik. N. F. 4. Bd. S. 657-658. derselbe. Der Sinn der Indexpzahlen. 1927. Vorwort. S. V. S. 74.
- 16) Friedrich A. Hayek. Geldtheorie und Knjunkturtheorie. 1929. S. 28. S. 117. derselbe. Preise und Produktion. 1931. S. 52-53. S. 55-56 S. 62. S. 114.

- 17) J. M. Keynes. A Treatise on Money. 1930. I. Vol. p. 79 ff.
- 18) 私見を以てすれば、此の論文には此の二つの問題が混在してゐる。兩者は何ら必然的な連絡を有しない。而して此の論文の意義は「貨幣價格決定の問題」の解答たる點にある。
- 19) Bilimovicz. a. a. O. S. 355.
- 20) Bilimovicz. a. a. O. S. 361. S. 359. S. 699-700.
- 21) Bilimovicz. a. a. O. S. 696. ビリモヴィツチは經濟過程が一時的にして、永續的でなければ、誰も將來不必要な貨幣を需要しないから、貨幣は交換價值を有し得ないといふ。即ち貨幣の價值は經濟過程の持續性を前提してゐる。永續的な經濟過程を前提するのは此の爲めである。(Bilimovicz a. a. O. S. 693.)
- 22) Bilimovicz. a. a. O. S. 696-697.
- 23) 簡單の爲めIとする。貨幣の流通速度の増加そのことが直ちに物價の騰貴を來す譯ではない。それは先づ商品及び貨幣の需給の不一致を創り出す。而して此の不一致があつて始めて物價の變動を生ずる。(Bilimovicz. a. a. O. S. 704.) ビリモヴィツチは此事を算術的な例で説明してゐる。(S. 701-704. の第二の場合。)
- 24) 彼は欲望の可測性を前提せずして、ただその比較可能性のみに基づいて價值論を樹たようとしてゐる。(Bilimovicz. Zur Frage der wirtschaftlichen Güter. Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung. 20. Bd. 1911. S. 623-698. derselbe. Die Preis- und Wertlehre. Volkswirtschaftstheorie der Gegenwart. 2. Bd. 1932. S. 94-113. derselbe. a. a. O. S. 368-369.) 従つて彼は本稿に紹介する論文の後半「積極的説明」に於ては、不等式を用ひてその積極的説明を展開してゐる。固よりかゝる限界效用曲線の前提は Bilimovicz 獨特の立場に脊むくが、彼は此の場合數理經濟學者の一般に用ひる方法をも便宜上採つてゐる。
- 25) これは指圖證說の當然の結果である。詳説を要しないと思ふ。Bilimovicz は Walras 及び Pietri-Tonelli の批評に托して此のことを説いてゐる。(a. a. O. S. 369. S. 371-372.)
- 26) 方程式群 II、及び IV の利用により此式中の一つは此の方程式群の他の者より導き出し得る故に、一見 m 有る如くして、事實 m-1 しか方程式はない。
- 27) F. Oppenheimer. Vorwort zur deutsche Ausgabe von R. G. Hawtreys Währung und Kredit, S. VI. Jena. 1926. Hans Neisser. Der Tauschwert des Geldes, S. 2. Jena. 1928. (Bilimovicz. a. a. O. S. 354-355.) G. Haberler. Kritische Bemerkungen zu Schumpeters Geldtheorie, u. s. w. S. 648-646.
- 28) Alfred Michalis. Die Quantitätstheorie als Grundlage der Konjunkturforschung. Jena. 1929. (Bilimovicz. a. a. O. S. 857-359.)
- 29) 同様の思想はロバートソンにも見出される。D. H. Robertson. Money. I. ed. p. 28. ff. New. ed. p. 28. ff.
- 30) 31) 後述参照。
- 32) Bilimovicz, a. a. O. S. 367. S. 374. ではこの問題を「貨幣論の中心問題」と呼んでゐる。Bilimovicz によれば L. Walras とそ、最初に交換方程式を立てた學者であり、然もその何よりの功績は、これを、一般均衡の體系の中に取入れたことである。而して今茲に問題とする das nötigen Kassenbestand (l'encaisse désirée) の問題も既に彼によつて提出せられてゐるといふ。(a. a. O. S. 362. S. 368.)
- 33) Bilimovicz. a. a. O. S. 373-375. S. 700-701.
- 34) 此の所與の條件といふ中には價格の状態も含まれてゐる。手許準備金は絕對的にではなく、價格と相對的に定まる。(Bilimovicz. a. a. O. S. 700.)
- 35) 上述参照。
- 36) Bilimovicz. a. a. O. S. 375. 37) Bilimovicz. a. a. O. S. 726.
- 38) A. Bilimovicz. a. a. O. S. 360. 高田博士. 「貨幣の價值の受動性」經濟論叢. 第三十四卷. p. 719. Wieser. a. a. O. S. 179. Schumpeter. Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. 2. Aufl. S. 70. 尙 Schumpeter の上掲論文に於ける Fischer の流通速度論批評. (S. 683-684. 脚註) には首肯も難い點がある。靜態に於て流通速度が一定してゐるといふ主張は、動態に於てそれが變動することを排除しない。
- 39) Bilimovicz. a. a. O. S. 360-361. 40) Bilimovicz. a. a. O. S. 356-357.
- 41) Bilimovicz. a. a. O. S. 355-356.
- 42) Schumpeter. Das Sozialprodukt. u. s. w. S. 714.
- 43) Schumpeter. Das Sozialprodukt. u. s. w. S. 667.
- 44) Bilimovicz に於てはそれによつて買入れられるのは消費財であつて、生産財ではない。
- 45) Bilimovicz. a. a. O. S. 701.